

日本人形の衣裳にとことん迫る本企画。人形の衣裳に使われている文様や生地はもちろん、着せ方についても詳しく解説していきます。業界のスペシャリストを講師に迎え、衣裳の基礎から応用まで教えていただきます。知識の習得や再確認、セールストークにお役立てください！  
第5回も引き続き「女房装束」です。単、長袴、裳について詳しく調べてみました。

## 女性の装束

## 五衣唐衣裳

五衣唐衣裳は「いつつぎぬからぎぬも」と読み、十二単は俗称。

平安時代においては宮中女子の標準服だったが、現在では御即位の大札の儀や御成婚などの宮中の儀式でのみ、皇室・皇族がお召しになる。

十二単が誕生したのは十世紀頃（平安時代中期）と言われている。ただ当時の装束については記録が少ないことから、室町時代末期頃には誕生当初と異なるものになっていたという。

明治維新前の装束「御再興」により平安時代に近い形に戻された。御即位の大札の儀、皇族妃の御成婚に見る十二単の姿はこのスタイルが基となっている。

今回をもって一旦、女房装束の解説を終えることができそうです。前回、「五衣」「打衣」「表着」「唐衣」を調べて、まとめました。今回は、「単」「長袴」「裳」を解説します。

松井さん 6月は各地、各社で展示会が開催されていきましたね。たくさんの人形をご覧になったのではないのでしょうか。

この企画を始めてから、もう少しで1年がたちます。やはり人形の見方が変わった気がします。とりわけ、じっくり見てしまうのが衣裳の生地。正絹ではないものと比べて、どう違うのか。自分で感覚を掴むためにもたくさんの人形を見たいと思うので、展示会の取材はよい機会でした。

松井幸生さん  
株式会社善助商店社長  
Matsui Yukio

金襴織物・裂地の製造卸商を営む。菅田屋勤兵衛から数えて13代目。京人形商工業協同組合副理事長。平成12年伝統的工芸品産業審議会臨時委員任命。翌年、伝統的工芸品産業の奨励賞を受賞した。

## 今日の先生



※各衣の解説①は連載第4回掲載

十二単〈各衣の解説②〉  
単／長袴／裳

## ●単（ひとえ）

当初、単は肌着だった。絹で仕立てられ、消耗品という位置づけ。肌着から昇格したのは平安後期。白無地の小袖が肌着として一般的になると、それまで下着だった単は桂の下に着用されるものになった。単は桂よりも一回り大きい作りになっている。その理由は桂が直接肌に触れるのを防ぐため。単は袖先や裾先が桂よりも長く仕立てられているので、汗などで桂が汚れることはない。汚れ防止に限らず、単の存在は装束全体のポイントとなり、優美な印象を際立たせることに一役買っている。

単の文様について。古くから好まれていたのは「小菱文様」。鶴岡八幡宮御神宝の人も、花菱文である。花菱文は「先間菱」と称される。この呼称は衣紋道の流派によつて異なる。高倉流は「幸菱」と訓読み、山科流は「千剣菱」と音読みして呼んでいる。

## ●長袴（ながはかま）

長袴の色の基本は紅だった。もちろん紅以外にも用いられる色があり、晴れの儀で着用された濃色や、※白拍子が履いた白の袴があった。

長袴に多く用いられる織り方を「精好」という。太く組んだヨコ糸を織り込み、横への張りを強めた。裏地に別の生地は使用せず、裏地にまで精好を用いた。仕立て

※白拍子……平安時代末期から鎌倉時代の歌舞の一種。それを演ずる芸人（静御前など）

は、表地を裾から折り返して裏に回す「引き返し」という方法を採用。これが一般的だ。女性の袴に重視された張りの強さを実現し、歩きやすさを可能にしている。

**松井さん** 紐の先端には立鼓（龍鼓）と呼ばれる飾りが縫い付けられています。左撚糸の紐と右撚糸の紐（左写真）とをセットで使い、鼓のような形の模様を作ります。重しのような役目です。

腰紐のところにも細い左撚糸右撚糸の露紐（左撚糸右撚糸をセットにして使うもの）を飾り紐として使います。

濃色は連載第2回「有職の色」で学習しましたね。

**松井さん** そうです。復習になりますが、平安時代の女房装束の打袴の色は、本式が紅色（紅袴）で若年は濃色でした。

令和元年「即位礼正殿の儀」に臨まれた秋篠宮ご夫妻の長女眞子様と次女佳子様がお召しになった



左撚糸 右撚糸の紐  
画像提供／誉勘商店

袴の色が濃色と解説しましたね。それと年齢に限らず、未婚・既婚で異なる色合いの装束をお召しになることもあると教わりまし

た。濃色は未婚者が着用する袴の色と説明されることがあります。有職故実の文献に明記されていないというのを覚えていきます。

●裳（も） 飛鳥時代以降、今でいうロングスカートのように引きずるくらい丈が長い褶と呼ばれるものを着用していた。歩きやすくするために前の部分を短く仕立てるようになり、後ろ部分だけを長く引きずるような現在の裳の形になったと言われている。平安時代の裳には、頒幅と呼ばれる短い生地が左右に付いていた。これは短くなった前部分の名残とされている。江戸時代になると裳はさらに短くなる。懸帯が付き、肩に掛けて裳を背負う形になった。

裳の文様や色について定めがないが、多かったのが「海府文様」浜辺や松といった海をモチーフとしたもの。摺文様が型友禅で描かれた。皇族が着用する裳は、三重襷文の織物の上に桐竹鳳凰文が摺り置かれている。

裳の型ですが、この説明ではあまりイメージできません。

**松井さん** それでしたら、高松塚古墳の壁画「西壁女子群像」を見るとよいですよ。着物の上から巻きスカートのようなものを巻きつけている感じですよ。江戸時代には、マントのように肩から背負う形になったこともあります。

不思議な変化ですね。

**松井さん** ファッション的な要素が強かったのかもかもしれませんね。それと懸帯は天保14（1843）年の「御再興」以降、徐々に廃止されました。



- ①大垂髪（おすべらかし）
- ②唐衣（からぎぬ）
- ③表着（うわぎ）
- ④打衣（うちぎぬ）
- ⑤五衣（いつつぎぬ）
- ⑥単（ひとえ）
- ⑦長袴（ながばかま）
- ⑧大腰（おおごし）
- ⑨裳（も）



※説明のため櫛扇を外した状態で撮影

参考文献

- ・仙石宗久著「十二単のはなし——現代の皇室の装い」（朝日新聞出版、1995年）
- ・八條忠基著「有職装束大全」（朝日新聞出版、2018年）
- ・八條忠基著「素晴らしい装束の世界」（誠文堂新光社、2005年）
- ・鈴木敬三編「有職故実大辞典」（朝日新聞出版、1996年）

撮影協力／株式会社吉徳

※本連載は隔月連載です。第6回は2022年10月号に掲載します